

「オタクを論ずること」をめぐる批評的言論と社会学との距離に関して Sociological or Critical attitude toward “Discussed about Otaku”

永田大輔¹
Nagata Daisuke

¹筑波大学大学院博士後期課程 Tsukuba University

要旨：本稿は、オタクを社会的に論じるうえで生じる困難の一つである批評的言論との距離の取り方を考察する。その中でもその「批評」性を踏まえ、オタクをめぐる批評的言論を検討する必要がある社会学においてはとりわけ大きく存在していることを議論する。

キーワード：批評、オタク、社会学と「社会学」、客観性、当事者主義

[1]はじめに

マスメディアに登場する知識人（識者）やコメンテーターで社会学者をプロフィールに掲げるものが、2000年代から増え始め、2000年代後半から当の社会学者自身がそのことを問題視するようになってきた。そのきっかけとなるのが文壇・論壇における社会学の受容である。そのきっかけの一つとしてオタクをめぐる議論が一部の文壇・論壇でその存在感を増したことがある。だが、そこでいかように社会的な議論が必要とされ、そこで必要とされてきた社会的な議論と学問的な社会学の議論とはどのような関係にあるのだろうか。本稿は、オタクを社会的に論じるうえで生じる困難の一つである批評的言論との距離の取り方を考察する。

[2]研究の方法

ウォルター・ベンヤミンの芸術＝批評概念を検討したうえでそれに示唆を受けつつ、オタクに関する批評的言論を分析する。ベンヤミンは彼の博士論文の中でドイツ・ロマン主義と芸術批評の概念との関連を考察した。ここでは芸術における批評概念の特性を反省性におく。彼が指摘するのは、個々の作品を超えて絶対的なものへの志向性としてロマン主義における芸術批評概念があったことである。ここでは芸術はそれ自身が批評性を内在的に持つものとして存在すると同時に、その批評性は言語による批評を得ることではじめて芸術として完成するとされる。つまり、芸術はそれだけでも一定の批評性を持つが、それが批評（＝言語化）を受けることではじめて個々の作品の具体性を超えて、芸術＝批評として完成するとされるのである（Benjamin 1917=2001:239-261）。

こうした論理が、本稿でとらえようとしているオタクとオタクをめぐる批評との関係を捉えるうえでも重要な役割を果たす。なぜなら、オタクという対象はその振る舞いの批評性が問題となり続ける一方、それをめぐる批評が先行した存在だからである。そもそもオタクは、その起源を中森明夫に振り返ることができるが、そこでのカテゴリーの成立の仕方からしても、批評的な営為と不可分の集団である。というのも、オタクという集団はそもそも、「互いにオタクと呼び合っている人々」のことを中森明夫がオタクと呼んだことによって成立したカテゴリーであり、ある特異な行為（互いにオタクと呼び合う）に対する批評的なまなざし（そうした呼称を互いに用いる人々をオタクと呼ぶ）によって成立したカテゴリーだからである。そこで本論ではむしろオタクというカテゴリーを考えるうえで批評的な言論が不可欠であるとの前提に立って議論を展開する。

とりわけ、社会学という議論との距離の取り方を批評的言論の側から取り上げるという方途をとる。そして、その前提として批評と社会的な知が不可分であることを論じる。具体的に[3]社会学という学知がオタクをめぐる批評的言論においてどのような需要のもとに受け入れられていったのか[4]批評的な学知が受容されたことを社会学の側が反省的にとらえ返す議論が存在したこととその意味を議論する。

③客観性への需要

(1) オタクをめぐる言論の閉塞

オタクの語りにくさは、学問と批評の距離のとりにくさだけではなく、批評的言論内面的にも繰り返し論じられてきており、このこと自体が一つのクリシエになっている。東はその語りにくさを以下のように問題化する。

宮崎事件により生じたこのような分裂は、九〇年代が終わるまで、オタク系文化について客観的に正面切って語ることを難しくしていた。(中略)つまり、簡単に言えば、一方にはオタクなどにそもそも価値を認めていない人々が、他方にはオタクについては特定の集団だけが語る権利を持っていると考える人々がいて、その両者のどちらにも加担しない立場をとるのは極めて難しかったのだ。(東 2001: 11)

このようにオタク文化に関する特有の語りにくさが、「宮崎事件により生じた」とされ、オタクという集団に関して「当事者主義」か「負のラベル」か、どちらかの価値づけを伴う言論が圧倒的に優位に立っていることに枠づけられていることが言及されている。このように「客観性」を持ってオタクを語る指向性とその困難をめぐる感覚がオタクをめぐる批評には存在する。その前提となる当事者主義の根強さとその困難を次節で確認する。

(2) 当事者主義とその限界

1980年代にオタクに関する言論が展開された初期の論理に関して本節では検討する。オタクに関する言論を考えるうえで確認すべきなのが、1983年に中森明夫がオタクという概念を提示したことである。そこで中森は以下のようにオタクに関して議論していた。

『おたく』の由来については、まあ皆も察しがつくと思うけど、たとえば中学生くらいのガキがコミケとかアニメ大会とかで友達に「おたくらさあ」なんて呼びかけるのってキモイと思わない？（「おたくの研究(2)」『漫画ブリッコ』1983年7月）

このように「キモイと思わない？」のような形でオタクという集団に対する評価がネガティブな調子で語られていた。しかし、オタクは結局のところ1989年まで問題化することはなかった。浅羽道明は1989年以降に中森の言論をもう一度取り上げている。ここでの前提は新人類の自己差異化運動としてオタク批判が起こったという図式である。それを浅羽は以下のように語る。

ほかならぬ「中森明夫」によってネーミングされた「おたく」という言葉自体、差別語というよりも自嘲語だったのではないかと彼らは自嘲により、自分だけは自覚ができています⇒最悪の「おたく」ではない、という安心感を得るために使った。(浅羽1991: 269)

このように中森自身も「おたく」であるが、自己差異化のために行った批評であると観察している。これに関しては捻じれた論理が存在するように思われる。中森は実際に『おたくの本』と、『Mの世代』というオタクが社会問題化するうえで重要な役割を果たす書籍にも参加している。このような存在がオタクの当事者性を付与されないものであると位置づけることの困難がそこにはあり、「宮崎事件」以降のより強い差別者（＝負のカテゴリーの付与者）に対して、中森の当事者性を確保させようという方向性であったといえる。起源の付与者である中森の言葉をどの位置に置くかがオタクをめぐる言説の初期の戦略において大きな問題となっていたのである。誰が当事者なのかをめぐる新人類とオタクの相同等性が持ち出され、批評の批評が積み重なっていくのである。

本節では中森が持つ負のラベルを弱毒化するために、中森は実は当事者であったのだという形の論理の形成の仕方が89年の社会問題化を契機に起こっていたことを見た。次節ではむしろ中森自身の当事者性を伴わないで済む論理と独自のオタク論を作り出そうとした議論として岡田斗司夫の議論を見る。

(3) 岡田斗司夫の言説戦略

宮崎事件に対して距離化する言論の中で 90 年代のオタクをめぐる議論において重要なものは二つ存在する。一つはエヴァンゲリオン・ブームとそれに伴う謎本・解釈本をはじめとした半アカデミックな言説の氾濫である。もう一つはオタクの情報エリートとしてのイメージの押し出しである。どちらのキーパーソンとしても出てくるのが後にエヴァンゲリオンを作ることになる GAINAX の社長をしていた岡田斗司夫である。彼は 1994 年から東大でオタク学の講義を行うなど 1990 年代の中盤を通してオタクのイメージ戦略で重要な役割を大塚と並んで果たした人物である。それでは岡田がオタクを語るときにその起源をどのように位置づけているのだろうか。

いずれにせよ、「スタジオぬえ」のオタクたち、およびその作品『マクロス』がきっかけで「オタク」という呼び方はあつという間にオタクたちの間で広がった。コミケと呼ばれる同人即売会にくるような、初心者のファンたちまで「オタク」「オタク」と呼び合うようになった。同時に、自然発生的に「オタク」と呼び合う人々を「あいつら、オタクだから」と十派一絡げに差別する言い方も生まれた。だから、82 年の夏ごろにはすでに SF ファン同士はお互いを「オタク」と呼ぶのをやめていた。「オタク」という言葉はまずオタク自身の中で差別用語になったのだ。(岡田 1996[2008] : 12)

ここで中森明夫の議論を意識しつつも、「82 年の夏ごろ」には「お互いを『オタク』と呼ぶのをやめていた」と、中森が問題化する直前の時期を指示している。岡田の言説の戦略性はいくつかある。一つは、1989 年の宮崎事件を受けつつ、オタクという言葉が差別語としてのニュアンスをもっていることの是正である。ポジティブなカテゴリーとしてオタクというカテゴリーを位置づけようとしていることである。そもそも中森のオタクの定義づけが元来ネガティブなものとして展開されていた。そこでここではまず 82 年の夏といった強調を行うことで当事者言語であることが示される。そうすることで(中森自身も元来はそうした論法をとっていたのだが、)オタクが中森によって外部から名指されたものだという位置づけを再確認しており、オタクを当事者言語としている。

そのことがただの証言ではなく証拠として外部化されていることを示すために表象を取り上げている。岡田は「オタクが作ったオタク向けアニメ」として『超時空要塞マクロス』を、中森より先に二人称でヒロインが主人公にオタクと呼びかけていた表象の事例としている。そのうえで岡田が強調するのは、社会問題になる(すなわち中森がオタクという言葉メディア上で使う)ときにはオタクが当事者言語としてはもはや使われなくなっていたことが指摘されるのである。このように岡田の歴史の記述法は高度に歴史をコントロールする文化政治的な文脈が存在する。カテゴリーをポジティブに打ち出すためにエリートとしてのオタク像を提起する戦略をとり、その担保として中森の代わりに自身を「オタキング」としてその代表に据えるような戦略をとる。

しかし、同時にこうした文化政治的な戦略をとったことで岡田は、オタクというカテゴリーをめぐる議論から自ら降りざるを得なくなる。岡田(2008)において、彼は「オタクの死」という挑発的な議論を提起している。だが、これを「岡田が最近のオタクについていけなくなったからだ」とも「オタクがダメになったからだ」とも解釈することは正しくない。それは彼のオタクをめぐる議論の定義の必然でもある。彼が最近のオタクに対して問題化するのには既存の言論に安易に乗ることである。本来批判の前提であったはずのマスメディアが作った根拠づけに従って自らをオタクと根拠づけることが彼の語るオタク像と大きく異なったものなのである。しかし、オタクの定義自体が広く氾濫すればするほど、そのカテゴリーと距離化できないものは増えていく。その必然として岡田の定義に当てはまるオタク像が説得力を持たなくなっていくのである。

[4]客観性を満たす言説としての社会学

(1) 宮台真司の言説受容

このように宮崎事件を始点としてオタクを語ることをめぐって、複雑に誰がどのように起源を語るのかが問題化されていた。ここまで確認したようにマスメディア等のラベルではない言説としては、当事者性が圧倒的に主流な言説であった。しかし、その反動として客観的にオタクを語ることへの需要も存在した。90 年代に論壇内で社会学は一定の立ち位置を占めるようになり、「一九九〇年代は社会学と心理学の時代と言われる」(東編 2004: 7)とされるまでになる。社会学の批評内での重要性はオタクをめぐる言論においても同様であった。

社会学者でオタクをめぐる議論において重要な立ち位置をとるのが宮台真司の一連の議論である。宮台は彼の

言論活動の中で初期から重要なアクターとしてオタクを位置づけており、それは彼の議論の理論構成にも大きく関係している。彼の議論の中で特筆して着目すべきことは、彼がオタクを、はじめどのように根拠づけようとし、どのように言説を展開させたかであり、結果どのような位置を批評的言論内で獲得したかである。

さらに新人類文化が「誰もが乗れる船」ではないことが明らかになり、一部のロリコン誌でオタク差別が始まる83年以降になると、少女マンガにはリーダー/フォロワー/完全な乗り遅れ、といったさまざまな類型の女の子の視点が同時に描かれ、〈他者〉としての〈彼女〉を取り込んだ〈関係性モデル〉が周囲のどんな対人関係にも適用できるほどに複雑化していく。(宮台編 1993 [2007]: 34)

新人類からの分化として、オタクの分出を議論する点で浅羽の議論と同一であるが、重要なのは「当事者性を問題化していないこと」と「おたく」を二つに分けることで新人類的なモデルから零れ落ちるものとしての「おたく」もオタク内部の問題として処理が可能になったことである。こうした宮台の議論の前提には二つある。

一つは消費社会における対応のバリエーションとしての人格類型論である。1985・1986年の最終的に宮台(1987 [2010])に結実する調査では、消費社会における対応の仕方の5類型が述べられている。また1990年の調査が宮台編(1993 [2007])の直接の前提となる調査であり、類型ごとの宗教性の違いが論じられる。宮台はこれらの図式を後に新人類/オタクの図式に重ね合わせながら論じている。もう一つの図式がそうした中で消費社会の論理は進展していくものであることである。この変容は彼の消費社会論の前提が大きく関係している。

以下で順に検討することにする。宮台は一連の調査から「ネクラ的ラガード」などのいくつかのカテゴリーを作り出しており、それとオタク/新人類などの図式にあてはめ、彼らの消費様式に対する反応と文化現象を重ねて議論する。しかし、この人格類型を持ったもの同士が相互に関連していることである。そこにはドライブの島宇宙化という彼の理論的前提となる議論がある。宮台は新人類を当初はオタクと不可分であったとする浅羽の説を支持しながら、その論理的必然性を説明する。それは消費社会に付随する差異化のゲームが結局、卓越化を進行させ、乗り切れないものが出る。その乗り切れなくなったものがオタクであり、差異化のゲームの果てには「オタクというのは、それまでは曲がりなりにも維持されてきた世代内の透明性が失われた後に、周囲の視線には極度に鈍感に『同じ穴のムジナ』の群れに自らをひたす作法を名づけたものである」(宮台 1994: 88)から「内輪化」によって「やはり傍目には理解できないふるまいをするものが増えていく」(宮台 1994: 89)とされる。それを前提とし宮台の議論のなかで新人類/オタクといった図式から、次第にコギャル/オタク図式が前面に出る。

宮台の議論は統計的根拠などを持ちつつ、重要なアクターとして常にオタクを置くと同時に、その対立項となるもの(新人類、コギャル)との関係とそれをめぐる社会背景(消費社会、底が抜けた社会)という図式の中で論じていた。こうした議論が、価値づけを忌避し当事者性を媒介とせずオタクに関して客観的に論ずる議論の中で重要性を持つことになる。統計的手法によって大衆化そのものを説明することによって岡田のような陥穽を回避することができるという点で需要が存在したのだ。この需要を社会学側で問題化した議論を次節で検討する。

(2) 社会学と「社会学」

こうした宮台らの論壇での一定の受容を受けて、新たな論点を提起したのが佐藤俊樹である。そこで佐藤は、論壇的で売れる「社会学」(前述した宮台と大澤真幸が想定されている)と地道でサブカルチャーを取り扱うことがほとんどない学術的な社会学という対立軸を批評誌である『思想地図』上で展開した。そして、「社会学」がゼロ年代の批評において重要な立ち位置を占めていたと語り、その限定性を以下のように断ずる。

社会学の時代」で実際に起きていたのは、社会学の普及ではない。売れる著作と社会学内部での研究の乖離だった。当時の批評の場で「社会学」として知られていたのは、宮台真司のシステム理論であり、大澤真幸の第三者の審級論である。(佐藤 2010a: 219)

「社会学」の図式が前提とする共同体の崩壊等の解体論が50~100年も語られてきたことであり、「この種の

『解体』論は第一義的には当事者の信憑（佐藤 2010a：210）であり、「その変化が専門家の検証に耐える形で発見された事例を私は知らない」（佐藤 2010a：212）としたうえで宮台の統計分析に以下のような批判を寄せる。

『サブカルチャー神話解体』（PARCO 出版局、一九九三年）の計量分析について述べておくと、まず回収率が一五%なのでサンプルの代表性はあまりない。また、ここで使われた因子分析×クラスター分析による類型化は、結果の恣意性が高い。つまり、分析者が出したい解析結果を簡単にらせるし、分析者の仮説が信憑性を失えば解析結果自体も意味をなくす。そのため、現在では、使わない方がよいとされる。（佐藤 2010a：213）

このように手堅い実証的な議論を行う社会学と、現在の学問的水準からは問題があるが広く流通する「社会学」という差異を導入していく。このことを踏まえるとオタクに関して「社会学」の側の実証性を問うような研究こそが重要だとすることもできる。だが、前述したようにオタクというカテゴリーはそもそも批評とは不可分の言論である以上、批評的な「社会学」との距離をとろうとするときにもそれ相応の理論的操作が必要になる。社会学も批評もメタ志向を持つ言論であるが端的にメタに立つことのむずかしさがここでは存在するからである（3）。

（3）社会学の困難

この社会学と「社会学」の関係を具体的に考えるためにセカイ系をめぐる批評を検討する。セカイ系というジャンルがゼロ年代以降のオタクを語る文脈では重要な位置を占めていた。それに対して社会学者の一部が脱社会性の議論として引き受け、果たして現代は脱社会性が主流であると位置づけていいのかといった議論がなされた。

セカイ系とはポスト・エヴァンゲリオンと呼ばれるような作品群であり、その特徴として「君と僕」といった言葉に代表されるように中間集団がほとんど存在しない世界観を描いた作品である。その中でも代表的なものとしては『イリヤの空、UFOの夏』、『ほしのこえ』、『最終兵器彼女』などの作品が挙げられる（前島 2010）。

宇野常寛は、90年代以降の「東浩紀が評価するような」エヴァンゲリオンを中心としたセカイ系作品が、時代遅れであると指摘する。この古い想像力を持った集団としてのオタクへの批判をしその当時流行していたバトルロワイヤルなどのようなサバイバル的な要素を含んだ作品群をゼロ年代の想像力とした。

こうした流れがある一方で、セカイ系が構築主義的に構成されたものであることをまさにセカイ系論壇の当事者の一人である前島賢が述べている。前島（2010）では、宇野（2008）のセカイ系批判に対して疑問を呈している。前島によると、東浩紀の議論をセカイ系擁護として批判しているが、言及こそすれ「宇野常寛の登場以前に、東浩紀がなんらかの作品をセカイ系として擁護、評価したことはない」（前島 2010：194）とされる。そのため、両者の議論はすれ違って終わりのはずであったが、そうであるにも関わらず東浩紀がこの対立の軸を受け入れることでむしろセカイ系（東）vs 決断主義（宇野）の二項対立的なアリーナが形成され、周辺の論壇的な議論がこの対立の構図を再生産していくことで、終わりつつあったセカイ系の議論を再度沸騰させていったという極めて構築主義的な分析を行っている。このようにそもそもメタ的な性質がオタクをめぐる議論には強くみられる。

2000年代における最も重要な批評家である東がしばしば振り返るように批評は強いメタ性を持つ言論であり、文芸批評はある種のメタゲームである。これは本論でも援用したベンヤミンが指摘するように批評が、ただ解釈を示すだけでなく強い反省性を持つ言語であることと関係する。さらに、そうした議論を踏まえたうえで現代におけるフラット化（遠藤編 2010）した言論状況においてはこの問題はより複雑になってきている。

鈴木洋仁が、あまりにも安易に「メタになったつもり」になりつつ、真の意味では十分な反省がなされていない「メタメタ批評」と現在の批評を論じたことの意味が重要になる（鈴木 2014）。「メタメタ批評」とは批評の質が落ちたという揶揄に聞こえるが、これは個人の能力を超えて言論空間に枠づけられたものである。言論環境があまりにもオープンであり、フラットであるがゆえに簡単にメタな立場に立ててしまえるのである。その中で批評のメタゲームで優位に立つことは容易なことではなく、安易なメタにたとうとする行為はかえって批評的言論のベタな水準に飲み込まれていってしまう。そうした批評の空間の中で社会学が一定の立ち位置を占めている以上、その自覚がないまま議論を行うと、ただの「流通しない批評」「反省性が高いつもりで反省性が低い批評」になってしまう危険性もある。佐藤のいう社会学の立ち位置を作ることは思いの他困難な試みである。その

中でも学的な位置を保とうとするのであれば行為と批評との関係を安易に分断して「実証」の課題にするのではなく、その両者の関係を社会学自身が共依存（佐藤 2010b）と向き合いつつ粒さに見ていくことが必要なのである。

【注】

(1) オタクという言葉の記法には一般的には平仮名で「おたく」と書く場合、片仮名で「オタク」と書く場合の二つが存在し、時期ごとに大きくは 80 年代から 90 年代までは平仮名で書かれることが多く、90 年代中盤からは片仮名で表記されることが多い。この記法自体が高度に文化政治的な問題であり、本稿の課題と関わるが、煩雑さをさけるために引用部で明記されている以外は現在一般的な記法である片仮名でオタクと記載している。

(2) 本稿では論壇などで流通する「社会学」とアカデミックな社会学という佐藤の区分を参照しつつ、議論を展開するが、煩雑さを避けるため、そうした論点が浮上している場所以外では社会学で一貫して表記している。

(3) むしろ、この「社会学」/社会学に関しては、この区分自体が大澤・宮台の受容状況に関する観察を基にした概念という点で、オタクをめぐる批評と同型の構造を持つ議論として考えたほうが適切である。

【文献】

- 浅羽通明, 1991, 『天使の王国——「おたく」の倫理のために』 JICC 出版局。
- 東浩紀, 2001, 『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』 講談社現代新書。
- , 1996, 「庵野秀明(は) むににして八〇年代アニメを終わらせたか」 (再録:2002 『郵便的不安たち#』 朝日文庫, 199-221.)
- 東浩紀 (編), 2004, 『波状言論 S 改—社会学・メタゲーム・自由』 青弓社。
- 東浩紀・大塚英志, 2008, 『リアルなゆくえ——おたく/オタクはどう生きるか』 講談社現代新書。
- Benjamin, Walter, “Über die Wahrnehmung” (1917), *Gesammelte Schriften*, VI, Frankfurt am Main: Suhrkamp (=2001, 浅井健二郎訳 『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』 ちくま学芸文庫。)
- 遠藤知巳編, 2010, 『フラット・カルチャー——現代日本の社会学』 せりか書房。
- 前島賢, 2010, 『セカイ系とは何か——ポスト・エヴァのオタク史』 ソフトバンク新書。
- 宮台真司, 1987, 「消費の機能分析——現代大学生の消費生活の意味するもの」 (再録 2010, 『システムの社会学——宮台真司初期思考集成』, 勁草書房: 3-29.)
- , 1994, 『制服少女たちの選択』 青土社。
- , 1995, 『終わりなき日常を生きろ——オウム完全克服マニュアル』 筑摩書房。
- 宮台真司編, 1993, (=文庫 2007) 『サブカルチャー神話解体——少女・音楽・マンガ・性の 30 年とコミュニケーションの現在』 筑摩書房。
- 中森明夫・大塚英志編, 1989, 『M の世代——ぼくらとミヤザキ君』 太田出版。
- 岡田斗司夫, 1996, (=新潮文庫 2008) 『オタク学入門』 朝日文庫。
- , 2008, 『オタクはすでに死んでいる』 新潮新書。
- 佐藤俊樹, 2010a, 「サブカルチャー/社会学の非対称性と批評のゆくえ——世界を開く魔法・社会学編」 東浩紀・北田暁大編 『思想地図 vol5 特集・社会の批評』 NHK ブックス: 205-233。
- , 2010b, 「【社会学/社会学】背中合わせの共依存——あるいは「殻のなかの幽霊」」 遠藤知巳編 『フラット・カルチャー——現代日本の社会学』 せりか書房: 393-401。
- 鈴木洋仁, 2014, 『「平成」論』 青弓者ライブラリー。
- 宝島編集部編, 1989, 『別冊宝島 おたくの本』 JICC 出版局。
- 宇野常寛, 2008, 『ゼロ年代の想像力』 早川書房。